

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第957号 平成27年7月3日

## 驕れる者久しからず

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

これは、大変に有名な平家物語の冒頭の一節です。

6月25日に開かれた自民党若手議員の勉強会「文化芸術懇話会」での議員の発言や講師として出席した作家の百田尚樹氏の発言には、その傲慢さと無神経さに驚くというより、ここまで政治家の資質は劣化したのかと慨嘆せざるを得ません。

今回の自民党若手議員の言動に対して、「驕れる者久しからず」という平家物語の一節を想起した方も多いと思います。

さて、報道によると「文化芸術懇話会」においては、

- ・マスコミを懲らしめるには広告収入をなくせばよい。文化人が経団連に働きかけて欲しい（参加議員の発言）。
- ・沖縄の二つの新聞は潰さないといけない。あってはいけない事だが、沖縄のどこかの島が中国に取られれば目を覚ますはずだ（百田氏の発言）。

等とする発言があったようです。

「マスコミを懲らしめる」といった発言は、時の政権に対する批判的な報道は許さないという事であり、若手議員から、このような時代錯誤ともいえる発言がなされた事に、非常に不快なものを感じます。そして、私が最も懸念するのは、安倍総理大臣はじめ自民党や政府要人の中には、若手議員や百田氏の発言に共感する空気があるのではないかという事です。安倍総理が若手議員と同じ事を考えていると思っている訳ではありませんが、ただ、第2次安倍内閣が誕生して以降、マスコミに対する圧力を強めている様に感じられ、そうした空気が今回の若手議員の発言に繋がったのではないかと、私には、そんな気がしてならないのです。

今回の若手議員の発言には、政府・与党が成立を目指している安全保障関連法案に対して国民の支持が広がらない事に対する苛立ちと共に、その原因をマスコミが邪魔をしているからといった狭隘な意識が背景にあったのではないかと考えられます。しかし、国民に支持が広がらないのは一にかかって政府・与党の責任であり、言論による批判は言論で返すという鉄則を国会議員自らが放棄するような言動は、呆れ

るより他ありません。

若手議員は、内輪の勉強会という事で、調子に乗って発言したのかも知れませんが、恐らく反響の大きさに当人達が一番驚いているのかも知れませんが、もっとも、「文化芸術懇話会」に出席した大西議員が、6月30日に国会内で記者団に対し重ねて「一部報道に対して懲らしめなければならない」という趣旨の発言をしたとの報道もありますので、流れに乗って悪乗りしたというような事ではなく確信的な発言だったようにも思えます。いずれにせよ、公的な場であれ私的な場であれ、政治家としての自分の発言が社会にどのような影響を与えるかについて想像力を欠くようでは、政治家である資格はないといわざるを得ません。

また、百田氏は、「文化芸術懇話会」での発言に対して「オフレコに近い発言で冗談としていった（6月27日付北海道新聞他から）」と述べています。しかし、冗談であったとしてもいい事と悪い事があるだろうと思います。谷垣自民党幹事長は、「メディアへの批判や反論はあってもいいが、主張の仕方にも品位が必要だ（6月26日付北海道新聞から）」と述べていますが、百田氏の発言に品位を感じる事は私には出来ません。

今回の若手議員の発言に対して、自民党は、勉強会の責任者である木原稔青年局長を更迭する等の処分を行っていますが、当初は、一連の発言は私的な会合での発言であるとして、大きな問題とは捉えていなかったようです。それだけに、マスコミや世論の批判に押されて処分したという印象は免れません。

自民党議員の中にも、今回の発言に対して「同じ自民党として恥ずかしい」等と批判的な声がある一方で、木原青年局長の更迭に対して「木原青年局長が発言したわけでもない」「処分すると責任を認めた事になる。一気呵成に更迭するのは問題」等と批判する議員もいて、木原氏の処分を軽減する動きもあるようです（7月1日付読売新聞他から）。これでは、自民党として、今回の若手議員の発言の問題をどの程度深刻に受け止めているのか疑問を感じざるを得ません。

安倍総理は、国会で遺憾の意を表明してはいますが、それが国民の胸に響いているように感じられないのは、非常に残念だと思います。

更に、「文化芸術懇話会」が開催された日と同じ日に開催を予定していたリベラル系議員の勉強会は、安全保障関連法案を巡る党内の異論を封じ込め、引き締めを図るために事実上中止させていたという事も明らかになっています。政党というものは、自由闊達な議論が担保されてこそ活力が保持出来るので、党の方針に批判的な言動は許さないというのでは、組織の硬直化は免れません。

かつて我が国は、国家指導者達が国家方針への異論を封殺し、マスコミ等を巻き込んで大政翼賛の社会を作り上げ、結果、日中戦争という泥沼に入り込み、無謀な太平洋戦争へと突入していった苦い経験を有しています。

戦後 70 年の歴史を振り返れば、紆余曲折はあっても、我が国が一度として他国と矛を交えず、平和で安定した社会を維持して来られたのは、誰しもが自由にものいえる、民主的な社会であったからに他なりません。にもかかわらず、今回の若手議員の発言は、いい過ぎかも知れませんが、マスコミの政府批判を封じ込め、自由にものいえない社会へと舵を切ろうとしているかのように感じられてなりません。

日本の朝を再び「茶色の朝」にしてはならないという事を、あえて申し上げたいと思います。

「茶色の朝」というのは、フランスの哲学者フランク・パブロフ氏が書かれた本の題名で、政府が茶色以外のペットを飼わない事を奨励して以降、世の中が次第に茶色一色に染まって行く様子を描いています。

(塾頭 吉田洋一)